

マリン&レクリエーション実習のプログラム評価に関する事例研究

－自己概念の変化とプログラム満足度による少人数プログラムの検証－

井澤 悠樹・松永 敬子*

Case study about the effect that marine & recreation program gives to a self-concept:

Verification of the few students program by the change of the self-concept and program satisfaction

Yuki Izawa, Keiko Matsunaga*

抄 録

本研究の目的は、学生の自己概念の変化とプログラム満足度によってマリン&レクリエーション実習のプログラム評価を行うことである。

本研究では、マリン&レクリエーション実習に参加した学生6名を対象に事前調査・事後調査の2回の質問紙調査を行い、事前調査・事後調査ともに6部(100.0%)の有効回答を得た。また、実習の“振り返り”を自由記述で求めた。

結果として、定量的データからは自己概念の有意な向上が認められなかった。しかし定性的データから、プログラムへ参加することで、自己概念の向上につながる影響を受けていることが示唆された。

キーワード：マリン&レクリエーション実習、プログラム評価、自己概念、プログラム満足度

(2011年10月1日受理)

Abstract

The purpose of this study was evaluate the Marine & Recreation program by examining the change of the self-concept and program satisfaction of students.

The questionnaire was given twice, pre-test and post-test, to 6 students who had participated in the Marine & Recreation program. Both tests provide 100.0% of usable data. In addition, post-test requested students to reflect on the Marine & Recreation program through

* 龍谷大学

free writing.

As a result, significant increase in the self-concept was not verified from the quantitative data. However, qualitative data revealed possibility they had received influence of self-concept improvement by participating the Marine & Recreation program.

Key words: Marine & Recreation program, program evaluation, self-concept, program satisfaction

(Received October 1, 2011)

1. 緒言

教育機関における野外活動実習の効果は、感性や知的好奇心の育成、創造性や向上心の育成、親和・協調性の育成や自律・自発性の育成、自己拡大、自己客観視などが挙げられている(日本野外教育研究会 2001)。本学で開講されている身体活動Ⅱの集中プログラム・マリン&レクリエーション実習(以下、マリン)においても同様の効果を期待すると共に、本学独自の狙いとして1) 自身への気づき、2) 他者との相互理解、3) 自然への理解を設定している。過去のマリンについては、特に1) 自身への気づきについて、セルフエフィカシーや自己概念の変化に焦点を当ててプログラム評価を試み、マリンの有効性について報告を行ってきた(井澤ら 2009, 2010)。

これまでのマリンでは毎年40名近くの学生が参加しており、全体でのコミュニケーションを図った上で、ワーキンググループに分類され、マリンプログラムを通じて自己の気づきや他者への気づきを深めることが可能となっていた。更にワーキンググループと就寝時の部屋のメンバーとは異なり、多くの他者と接する機会もあった。また、プログラムに関しては、天候に大きく左右されることもなく、少なからず各々が成功体験を経て、その中で気づきを得るという有意義なプログラムとして展開されてきた。先行研究(井澤 2009, 2010)においても、マリンにおける成功体験とそれに伴う達成感や満足度、また、それらを共有する多くの他者の存在が、セルフエフィカシーや自己概念の有意な向上に影響を与えていることが明らかとなっており、学生が多くの気づきを得る機会となっている。

しかし本年度のマリンは、天候不順により日程が急遽順延され、それに伴い参加を希望していた学生の多くが不参加となった。そのような中で開催されたマリンであるが、少人数(6名)の参加者でも今までと同様にプログラム目的が達成され、学生にとって大きな気づきを得る機会となったのかは定かではない。そこで、本研究ではマリンのプログラム評価を行い、カリキュラムの1つとして、履修学生の人数等に左右されない効果的なプログラムと成り得るのかを、学生の自己概念の変化とプログラム満足度に焦点を当てて明らかにすることとした。

自己概念について、堀ら(2001)は「自分について持っている知識やイメージの総称」

と説明しており、自己概念の内容によっては個人の行動が異なると述べている。また梶田(1985, 1988)は「自分自身に対して抱く意識や気づきを『自己意識』とした上で、自己概念とは『人が持つ自己意識を暗黙のうちに支えている基盤的な構造概念』と説明している。言い換えれば自己概念とは、自分自身を主観的に捉えた評価であり、「自分から見つけた自分(影山ら2001)」と説明することができ、自己概念の変化を測定することで、マリンの狙いにある「自己への気づき」について明らかにできるのではないかと考えられる。

2. 研究目的

本研究の目的は、マリン&レクリエーション実習のプログラム評価を、学生の自己概念の変化とプログラム満足度によって検証することである。

3. 先行研究

自己概念に焦点を当てた研究では、影山ら(2001)は、自己概念と孤独感による測定で大学におけるキャンプ関連授業の評価を試みている。結果として、キャンプ実施群は、キャンプ非実施群よりも自己概念の有意な向上が認められ、また、自己概念が高い者ほど孤独感が低くなるとの報告を行っている。近藤(2004)は、組織キャンプ参加者の自己概念の変化に焦点を当て、県内で開催されている組織キャンプの事業評価を試みている。主な結果として、組織キャンプへの参加によって、自己概念は有意な向上を示し、下位概念では達成動機と努力主義においても同様の結果であったことを報告している。また、その変化は性差や体験内容に影響を受ける可能性を示唆している。また渡邊ら(2005)は、青年期の中でも最も複雑な心理状況にあり、内外共に混沌とした高校生においてこそ野外活動が必要であるとの考えのもと、キャンプ経験による女子高校生の自己概念の変化を明らかにすることを目的に分析を進めている。結果として、キャンプ経験によって得られた自己概念の変化は、キャンプ終了2ヵ月後まで効果が見られたと報告している。また、困難克服型プログラムでの成功体験やキャンプ自体の成功体験が自己概念に強く影響を与えるとともに、その経験を共有する周囲との関係性が重要であると指摘している。

他にも同様の報告(甲斐ら2007, 藁内2008)が見られるが、それぞれの研究において対象は異なるものの、野外活動を通じた成功体験やそれを共有する他者との関係を構築することで、対象者の自己概念が有意な変化を示すことを報告している。

4. 研究方法

4.1 マリンのプログラム概要

以下は、マリンのプログラム概要を示したものである。

実施日程及び実施場所

- ・実施日程：2011年9月12日～9月14日の2泊3日
- ・実施場所：神戸YMCA余島野外活動センター（香川県小豆郡）

主なプログラム内容

- ・マリンスポーツ
ジャジャ（1人乗りカヌー）、カヌー（3人乗り）、ヨット、ウィンドサーフィン、着衣泳であり、技術の習得はもちろんのこと、目標を達成する為の姿勢や思考の習得に取り組む。
- ・コミュニケーションゲーム
例年では、最終的にプログラムを一緒に行うグループの作成を目的として、普段、面識の無い学生同士のコミュニケーションを図るところに重点を置いて行われる。今年は特にアイスブレイク（緊張ほぐし）を目的として行われた。
- ・火を囲んで
通常のにぎやかなキャンプファイヤーとは異なり、火を囲みながら自然を感じ、静けさの中で今の自分と向き合う時間として過ごす。また、今年は例年とは異なり、余島のボランティアスタッフの方に参加頂き、スタッフの方と今まで体験されてきたことや自身の将来についてゆっくり語り合う時間とした。
- ・朝の集い
スタッフの話を聴いて、今後の進路やキャンパスライフについて考えることを目的として行われる。
- ・バーベキュー（以下、BBQ）
初日の夕食として、BBQが設定されている。食事の準備や片付けをグループワークとして行うことで、円滑なコミュニケーションを図ることを目的にしている。例年は、コミュニケーションゲームで分類されたグループごとに行うが、今年は6名であったこともあり、学生・スタッフ合同で準備から片付けまでを行った。

4.2 データ収集

マリ参加による学生の変化を継続的な測定によって行う為、アンケート用紙を用いて事前調査（以下、pre）、事後調査（以下、post）の2回でデータの収集を行った。

データの収集に関する詳細は下記の通りである。

- ・pre：2009年9月12日（土）、参加学生6名に対して、実習に向かう車中にてアンケート用紙を配布。回答後、その場で回収を行った。回収数（率）は6部（100.0%）、有効票本数（率）は6部（100.0%）であった。
- ・post：2009年9月14日（月）、参加学生6名に対して、実習振り返りの時間に同様のアンケート用紙を配布。回答後、その場で回収を行った。回収数（率）は6部（100.0%）、有効票本数（率）は6部（100.0%）であった。また、マリンを通じて感じたことや自身の心境の変化等について、自由記述方式で振

り返ってもらった。

4.3 調査内容

表1は、本研究において用いた質問項目を示したものである。個人的特性として、学内での所属・運動習慣・過去の運動経験・過去の野外活動経験・スポーツに対する嗜好・野外活動に対する嗜好を、プログラムに関しては、プログラム期待度 (pre)・満足度 (post) を設定した。また、学生の自己概念の測定には、自己成長性検査31項目 (㈱日本キャンブ協会 2006) を設定した。

表1 質問項目

【個人特性項目】	
<ul style="list-style-type: none"> ・学内での所属 ・運動習慣 ・過去の運動経験 ・過去の野外活動経験 ・スポーツに対する嗜好 ・野外活動に対する嗜好 	
【プログラム期待度 (pre)・満足度 (post)】	
<ul style="list-style-type: none"> ・ジャジャ(1人乗りカヌー) ・3人乗りカヌー ・ヨット ・ウインドサーフィン ・着衣泳 ・コミュニケーションゲーム ・火を囲んで ・朝の集い ・振り返り ・BBQ 	<p>期待度では、各項目について「1. まったく期待していない」から「5. 非常に期待している」までの5段階評定尺度で回答を求めた。</p> <p>満足度では、各項目について「1. まったく満足していない」から「5. とても満足している」までの5段階評定尺度で回答を求めた。</p>
【自己成長性検査31項目 (㈱日本キャンブ協会 2006)】	
達成動機	
<ul style="list-style-type: none"> ・私は自分の能力を最大限に伸ばせるよう、いろいろなことをやってみたい ・私は他の人にはやれないようなことをやり遂げたい ・私は将来、立派な仕事をしたい ・私は将来、他の人から尊敬されるような人間になるだろうと思う ・私は自分の理想に向かってたえず向上していきたい ・私は新しいことや違うことをいろいろしてみたい ・私は自分の主張を通す方である ・私は他の人に比べて能力などが優れていると思う *1 	各項目について「1. まったく当てはまらない」から「5. とても当てはまる」までの5段階評定尺度で回答を求めた。
努力主義	
<ul style="list-style-type: none"> ・私は一度自分で決めたことは途中で嫌になってもやり通すよう努力する ・私は他の人に認められなくても、自分の目標に向かって努力したい ・私はなんでも手がけたことには最善を尽くしたい ・私は現在の自分が幸福だと思ふ ・私は努力さえすれば成績は良くなると思ふ ・私はチャンスを逃さなければ、能力のある人は偉くなれると思ふ *2 ・私は人の一生は案外偶然の出来事で決まるものだと思う *2 ・私は人とうまくつき合っていける方である ・私はどんな不幸に出合ってもくじけないだろうと思う 	
自信と自己受容	
<ul style="list-style-type: none"> ・私は勉強や運動について自信を持っている方である ・私は自分を頼りないと思うことがよくある *2 ・私は今のままの自分ではいけないと思うことがよくある *2 ・私は現在の自分に満足している ・私はときどき自分自身が嫌になる時がある *2 ・私は人より劣っているのではないかと思うことがよくある *2 ・私は他の人をとてもうらやましく思うことがよくある *1*2 ・私は他の人に比べて能力などが優れていると思う *1 	
他者のまなざしの意識	
<ul style="list-style-type: none"> ・私は他の人からどんな噂をされているのか気になる方である ・私は自分が少しでも人から良く見られたいと思うことが多い ・私は小さいことをよくよと考えることが多い ・私は何かをしようとする時、他の人が反対するのではないかと心配になる ・私は自分の心が傷つくようなことを恐れている ・私は「あんなことをしなければよかった」と悔やむことが多い ・私は他の人をとてもうらやましく思うことがよくある *1 ・私は人からばかにされたりすることに我慢できない 	

*1は、他の軸 (因子) と重複している項目を示す。 *2は、逆転項目を示す。

4. 4 分析方法

分析は以下の手順で行った。マリン参加による学生の変化を定量的に測定する為、学生に対し pre・post の2度に渡りアンケート調査を実施し、回答を求めた。その際、pre では未来を、post では過去を想定して回答するのではなく、調査時の心境を最も反映するように注意を促した。また、post 時には、マリン参加による自分自身の変化や気づきについて自由記述での回答を求めた。

まず、マリンで主となる 10 プログラムに対する期待度と満足度の測定を行う為、期待度の測定では「1. 全く期待していない」から「5. 非常に期待している」、満足度の測定では「1. 全く満足していない」から「5. 非常に満足している」までの5段階評定尺度で回答を求めた。それぞれの項目の平均値を算出し、対応のある t 検定を用いて比較分析を行った。

自己概念の測定には「1. 全くあてはまらない」から「5. とてもあてはまる」までの5段階評定尺度で回答を求めた。また、31項目全てで自己概念を構成していると仮定していることから、31項目での合成変数を算出し、その平均値の差の検定を、対応のある t 検定を用いて分析を行った。次に、自己概念を構成する下位概念として、達成動機8項目、努力主義9項目、自信と自己受容8項目、他者のまなざしの意識8項目に分類し、各因子において合成変数を算出し、構成項目数で割った平均値の差の検定を、対応のある t 検定を用いて分析を行った。これら定量的分析で得られた結果について、自由記述を用いて考察していく。

尚、本研究で行う検定は有意確率を5%に設定し、分析を行った。

5. 分析結果及び考察

5. 1 対象者の特性

対象者は短期大学生3名、4年制大学生3名であった。現在の運動習慣では、週1日以上の「定期的実施者」は1名しかおらず16.7%であった。それ以外の者は「年に数回程度」「まったくやらない」との結果であった。また、過去の運動経験、及び野外活動経験では、共に半数以上の者が、経験が「ある」と回答している(表2)。

5. 2 プログラム期待度・満足度の比較

図1はプログラムの期待度と満足度の比較を示したものである。マリンの主となる10プログラムについて、期待度・満足度それぞれで平均値を算出し、その差の比較分析を対応のある t 検定によって行った。結果、4プログラムにおいて、期待度と満足度の間に統計的に有意な差が認められた。有意な差が認められたプログラムのうち、3プログラムは「火を囲んで」「朝の集い」「BBQ」であり、マリンプログラムでは「着衣泳」のみであった。それぞれのプログラムで有意な向上を示した理由として、以下のことが考えられる。

「火を囲んで」は本来であれば、キャンプファイヤーを目の前にして、自然に身を委ね

表2 対象者特性

[所属]	(n)	(%)	[スポーツに対する嗜好]	(n)	(%)
短期大学	3	50.0	好き	2	33.3
4年制大学	3	50.0	どちらかといえば好き	2	33.3
合計	6	100.0	どちらかといえば嫌い	2	33.3
[現在の運動習慣]	(n)	(%)	嫌い	0	0.0
週1・2日程度	1	16.7	合計	6	100.0
年に数回程度	2	33.3	[野外活動に対する嗜好]	(n)	(%)
全くやらない	3	50.0	好き	2	33.3
合計	6	100.0	どちらかといえば好き	3	50.0
[過去の運動経験]	(n)	(%)	どちらかといえば嫌い	1	16.7
ある	4	66.7	嫌い	0	0.0
無い	2	33.3	合計	6	100.0
合計	6	100.0			
平均(年)	4	7.5			
[過去の野外活動経験]	(n)	(%)			
ある	3	50.0			
無い	3	50.0			
合計	6	100.0			
平均(回)	2	3.0			

ながら自己と向き合うことを目的に開催されてきた。しかし今回は少人数ということもあり、自己と向き合う時間と合わせて、余島スタッフと様々な話をする時間を設けた。そこで得られた刺激が、「火を囲んで」の満足度向上に繋がったと考えられる。

「朝の集い」では、今までと同様にスタッフによる講話が行われたが、振り返りシートに記述されていた「すごく良い話を聞いた」、「私ももっと頑張ろうと思った」などからも考察できるように、少人数であるが故に個人に語りかける影響が大きかったことが考えられる。

また「BBQ」においても、今までの実習ではスタッフと学生は別テーブルで行われていたが、今回は同じテーブルを囲み、スタッフ・学生が相互にコミュニケーションを取りながら行ったことが良い影響を与えたのではないかと考えられる(表3)。

マリンプログラムにおいて有意な向上が認められなかった理由として、ヨットでは、沖に出た際に無風状態が続き、設定された目標を達成することができなかったことが大きく影響していると考えられる。またウインドサーフィンも同様に、コントロールが難しく、実際に風を掴まえて乗りこなすまでには至らず、成功体験を得たとは言い難い。カヌー(3人乗り)では、設定された目標は達成したものの、達成感よりも「思い通りに進まなかったし、腕もめっちゃ疲れて大変だった」「楽しい面もいっぱいあったが、体力的には正直つらかった」などの疲労感が先行したことが影響していると考えられる。

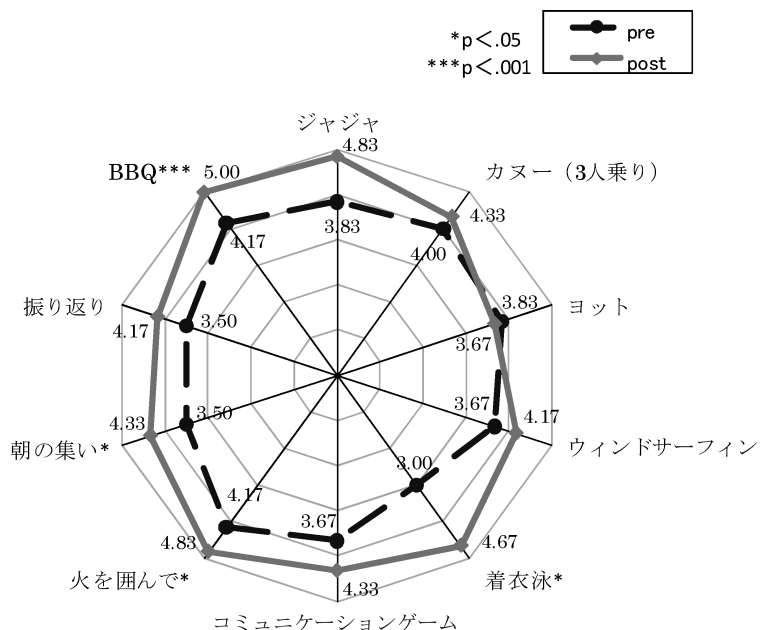


図1 プログラム期待度・満足度の比較

表3 プログラム満足度に関する主な自由記述

火を囲んで	私は、将やりたいことかなりたいものとか全然わからなくて、最近すごく悩んで、得意なこととか何も持っていない自分をイヤやなってしまうと思ってました。でもAさんは「もっと自分のことも大切に」って言っていて、自分のことを大切に思ったりしたこと無いなと思いました。…中略…自分にしか出来ないことを探しながら将来のことを考えていこうと思いました。
	2人(余島ボランティアスタッフ)とも、そこまで年が離れてないのに、いろんな経験をして、自分の信念みたいなものを持っててすごいなと思いました。今までこういう人たちと会って話す機会とか全く無かったから、もっともっと話を聞きたいと思ったし、私ももっといろんな経験してみたいと思いました。
	いろんな方の話を聞いて、新たなことを知り、自分のことを考える時間がゆっくり取れた。
	(火を囲んでの時は)迷ってることに對して的確なアドバイスをもらって、背中を後押しされた気分になりました。
	たまに、自分の人生が不安になることがありますが、2人(余島ボランティアスタッフ)の話を聞いて、不安になることはないなと思いました。
朝の集い	(実習を振り返って) B先生がおっしゃったように、自分で選択したことだからこそ、自分で責任を持たなければならぬと思うので何かに取り組むと、いつも以上に頑張れたような気がする。
	B先生のお話で、女性の社会進出問題について、…中略…私もその社会に挑戦していきたいから、もっと頑張ろうと思った。
	(C先生が話してくれた) 今、目の前にいる人を大切にする、という話を聞いて、私もそうしたいと思った。
	B先生の社会での女性の話とか、C先生がしてくれた「今まで出会った人はみんな大切になってる」っていう話とか、すごく良い話を聞けたと思いました。
BBQ	(1日目で) 一番楽しかったのは、バーベキューだった。
	(バーベキューは) みんなが楽しかった。
	(バーベキューが) 何よりもみんなとできたのがよかったし、用意とかも洗い物も、普段家ではできていないことで自分ですることで大変さも分かった。
着衣泳	着衣泳は初めての経験だったので、不安でしたが、ちゃんと浮けたのでよかったです。
	(浮けると) 分かってたけど、服を着て浮いてよかった。もし、船とかが転覆しても生き残れそう。
	はじめは水が冷たくて、イヤやなってしまうけど、みんなでやったらおもしろかったです。

※原文のままを記載

5.3 自己概念のステージ間比較

図2は自己概念のステージ間比較を示したものである。自己概念を構成する37項目(因子間を重複する項目を含む)の合成変数を算出し、その平均値の差の検定を、対応のあるt検定によって行った。結果、preでは105.33ポイント、postでは108.83ポイントと3.50ポイントの向上を示しているが、ステージ間に統計的に有意な差は認められなかった($t(5) = 0.92, n.s.$)。渡邊ら(2005)は、野外活動を体験することによる自己概念の変化について、事前調査時には80ポイントから90ポイントを示し、野外活動を経た事後調査時で100ポイント前後に向上すると報告している。つまり、気象の影響で実習日程を順延してもなお参加意思を示した6名であることから、対象者の自己概念は実習参加前の時点で比較的高く、本実習が対象者の自己概念を更に高めることができる刺激を与えるには至っていなかったと考えられる。

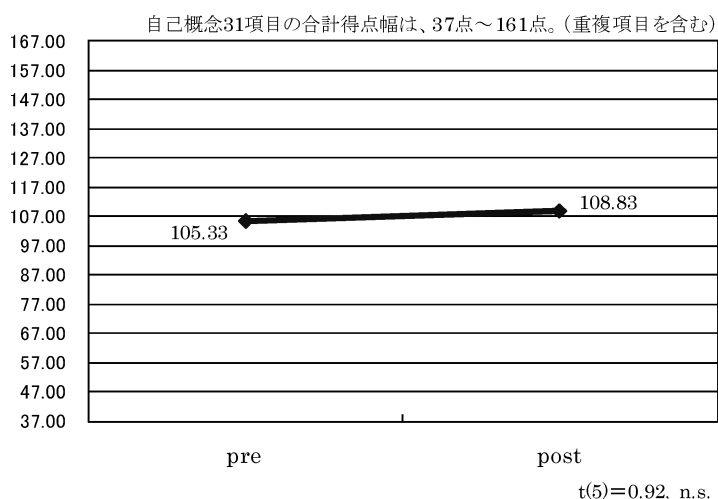


図2 自己概念のステージ間比較

5.4 自己概念を構成する下位尺度のステージ間比較

上述のように、マリン参加による自己概念の有意な向上は認められなかった。しかしながら、自己概念はそれを構成する4因子が独立したものではなく、相互作用によって構成されている為、下位尺度毎における検討も重要であるとの指摘があることから(梶田1988)、下位尺度毎でのステージ間比較を行い、検討を重ねていく。

図3は、各下位尺度を対応のあるt検定によってステージ間比較を行ったものである。各因子において構成されている項目数が異なる為、各因子で合成変数を算出し、構成する項目数で割った平均値を用いて比較分析を行った。結果として、4因子ともステージ間に統計的に有意な差は認められなかった。また、各因子において顕著なポイントの向上は見られない。

達成動機因子は、ある目的を達成する上でのモチベーションの役割を担う因子である。

pre ポイントから post ポイントでは、わずか0.25 ポイントの上昇であった。振り返りシートの自由記述では、当初は本実習に対して「面倒くさく感じていた」などのネガティブな態度が見受けられた。しかし、初日のプログラムを終えた時点から「(残りのプログラムを通して) もっと (みんなと) 仲良くなりたかった」とか「やる前からしんどいとは思わず、まずはやってみようと思う」などの前向きな姿勢が伺えるようになっている。また、スタッフの話聞いたことで、「将来について前向きに取り組みたい」との記述があったことから、自身の生活や将来について非常に前向きな姿勢を持てるように変化していることが見受けられる。しかしながら、先述したように定量的データでは、有意な向上は認められない。この理由として、達成動機因子は、努力主義因子の基盤となる概念であるが、この2因子の基盤となるものが、自信と自己受容因子である。つまり、自信と自己受容因子に対して有効的な影響が見られない場合、達成動機因子及び、努力主義因子にも影響が見られない可能性が考えられる。

努力主義因子は、達成動機因子を基盤とした行動の基本的規範、自己統制の態度を示す概念である。pre ポイントが3.56、対して post ポイントは3.63と、わずか0.07 ポイントの向上であった。この結果は、マリンプログラムにおいて、それぞれに目的が設定されていたが(例えば、ウィンドサーフィンでは、ボードに立ちセイルで風を捕まえる、ヨットでは1人で目的地へ行き、陸まで戻る、など)、沖へ出ると無風であったことや、技術を習得し、応用するまでには至らず、努力しても結果が伴わなかったことに起因しているのではないかと考えられる。

自信と自己受容因子は、自信を持って目標にチャレンジし、現在の自己を受け入れ、現状を変える為に努力するというような、達成動機因子や努力主義因子を基盤的に支える概念である。この因子では、pre ポイントに比べ、post ポイントでは0.10 ポイントのわずかな向上であった。この結果は、上述したプログラムの現状(無風状態など)によって、マリンプログラムでの成功体験が多くなかったことが大きいと考えられる。しかしながら、マリンプログラム以外ではスタッフ等の話を聞いて、自己と向き合い、現状を見つめなおす機会が印象的であった旨の記述が見られることから、少なからずは自信と自己受容因子に対して影響があったことが推察できるが、定量的データに表れるほどには至っていないと考えられる。

他者のまなざしの意識因子は、自信と自己受容因子と同様に達成動機因子や努力主義因子を基盤的に支える概念である。本因子においてはポイントの変化は見られなかったが、その理由として、少人数であった為1グループ編成であり、自分たちの周りには常にスタッフの目があったと感じていたのではないだろうか。人目を気にせず、自身が一生懸命取り組もうとすることに向きあったり、他者の意見に左右されず、自身の意見を通すといったことが出しにくい環境下にあったことが考えられる。例年のような大人数でのマリンでは得られない気づきがあった反面、少人数である為に、常に見られているという感覚を払拭するまでには至っていなかったことが考えられる。

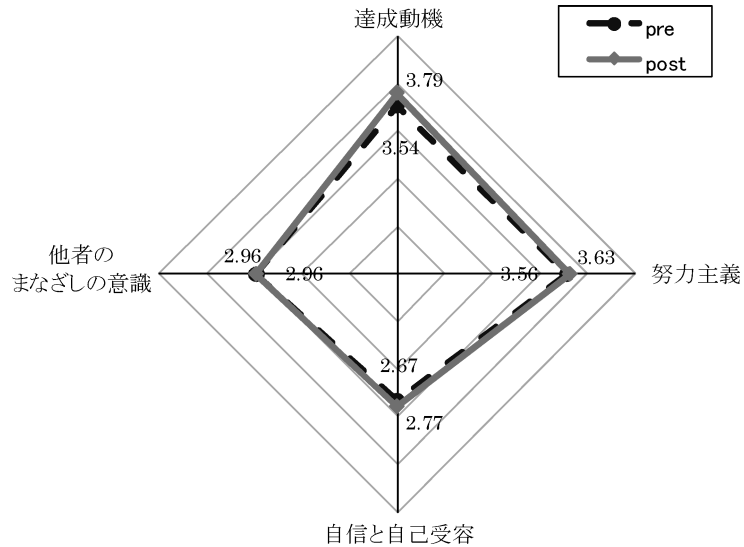


図3 自己概念下位尺度のステージ間比較

6. 結論

本研究の目的は、マリンのプログラム評価を、学生の自己概念の変化とプログラム満足度によって検証することであった。結果として、プログラム満足度では、期待度を有意に上回るプログラムも認められ、その満足度が自身に対する気づきへ影響を与えていることが自由記述の定性的データからは考察できた。しかしながら、プログラム効果を学生の自己概念、つまり「自己への気づき」について定量的に測定して分析した結果、学生の自己概念には有意な向上は認められなかった。

今回の事例では、プログラム満足度が自己に対する気づきへ影響していることは考えられるが、その影響を及ぼしているプログラムは、マリンプログラム以外のプログラムであった。例年の振り返りシートでは、マリンプログラムに対する姿勢や努力、その先にある成功体験について記述されていることが多く、スタッフの話による講話やマリンプログラム以外のプログラムから受ける影響については、比較的少ない傾向にあった。つまり今回のマリンで、定量的データで分析した自己概念への有意な向上が認められなかった理由としては、マリンプログラムでの満足度が伸び悩んだこと、また、同プログラムでの成功体験が比較的少なかったことに起因すると考えられる。

では、スタッフの講話が学生にとって有効的なプログラムではないのかといえば、それは違うだろう。スタッフの講話は、自身を見つめなおす重要なきっかけとなっており、今後、この経験を生かして自身が目標とすることに対して取り組み、成功体験を得ることで、「火を囲んで」や「朝の集い」でのスタッフの講話が大きな意味を成すのではないだろうか。事実、本実習での振り返りシートの自由記述では、マリンプログラムでの経験についても、スタッフとのコミュニケーションや話を聞くことで、自身と向き合い、今を見つめ

直し、将来の自分について考える“きっかけ”を得ることができたとの記述が顕著に見られる。課題は、この“きっかけ”をマリン期間中、もしくは、マリンを終えた後にも継続させることができるような働きかけが求められるのではないだろうか。

定量的な立場から評価した場合、事例として今回のマリンではプログラム効果は認められなかった。しかしながら、定性的データからは、少なからずプログラムの効果、又はプログラムの効果を表出させる為のきっかけ作りとなったことが考えられる。

今回のマリンは、天候の影響により参加学生数はもとより、少人数に合わせたプログラム展開など、例年に無い内容での実習であった。その中で、大人数では見られなかったプログラム効果やそれに伴う評価が明らかとなった。今後は、本研究を1事例として、マリンがより良いプログラムとして展開することができるよう、取り組んでいきたいと考える。

引用参考文献

- 堀洋道他編著（2001）『心理尺度ファイル』，東京都，垣内出版。
- 井澤悠樹・松永敬子（2009）“マリン&レクリエーション実習のプログラム効果に関する研究－学生の Self-efficacy に注目して－”『大阪女学院大学紀要』第6号， pp97-106.
- 井澤悠樹・松永敬子（2010）“マリン&レクリエーション実習のプログラム評価に関する事例研究－女子大学生の自己概念の変化に焦点を当てて－”『レジャー・レクリエーション研究－第40回学会大会発表論文集－』第65号， pp36-37.
- 甲斐知彦・佐藤博信・河鱈一彦・林直也（2007）“キャンプ集中授業における学生の変化－自己概念の変化について－”『スポーツ科学・健康科学研究』Vol. 10， pp9-14.
- 影山義光・布目靖則（2001）“大学キャンプ授業の参加学生の自己概念と孤独感の変化”『野外教育研究』Vol. 5， pp49-59.
- 梶田叡一（1985）『子どもの自己概念と教育』，東京都，東京大学出版。
- 梶田叡一（1988）『自己意識の心理学第2版』，東京都，東京大学出版。
- 近藤剛（2004）“鳥取県内の組織キャンプに関する評価研究－参加者の自己概念を中心に－”『鳥取短期大学紀要』第50巻， pp83-91.
- 養内豊（2008）“自尊感情、身体的自己概念の変容に影響する要因－長期キャンプ指導者としての体験から－”『北星学園大学文学部北星論集』第45巻， pp33-40.
- 日本キャンプ協会調査研究委員会（2006）『キャンプのものさし－野外教育活動を評価するための尺度集－』，東京都，社団法人日本キャンプ協会。
- 日本野外教育研究会編（2001）『野外活動－その考え方と実際－』，東京都，杏林書院。
- 野口和行（2001）“キャンプ経験による自己概念の変容－男子高校生を対象として－”『体育研究所紀要』第40巻， pp47-55.
- 渡邊仁・飯田稔（2005）“キャンプ経験による女子高校生の自己概念の変容過程”『野外教育研究』Vol. 9， pp55-66.